

当院における減感作療法の 治療効果について

なかまる動物病院
市野瀬 碧、峰崎 央、中丸 大輔

減感作療法とは

- 減感作療法は、アレルゲン特異免疫療法 (ASIT: Allergen Specific Immunotherapy)ともよばれる。
- アレルギー疾患を持っている患者にアレルゲンワクチンを漸増し、最終的には抗炎症薬の必要がなく、免疫寛容へと誘導できる免疫療法として位置づけられている。

(WHO 1997年 ‘アレルゲン免疫療法:アレルギー疾患の治療ワクチン’ 見解書)

- 獣医療では、犬に対し使用レポートが1940年に初めて報告。アメリカでは1960年、ヨーロッパでは1980年代から汎用されている。

緒言

近年、犬アトピー性皮膚炎に対して様々な治療が行われているが、多くが従来のステロイドを中心とした薬物療法に依存している。一方でステロイド長期投与による副作用を引き起こす危険性も少なくない。

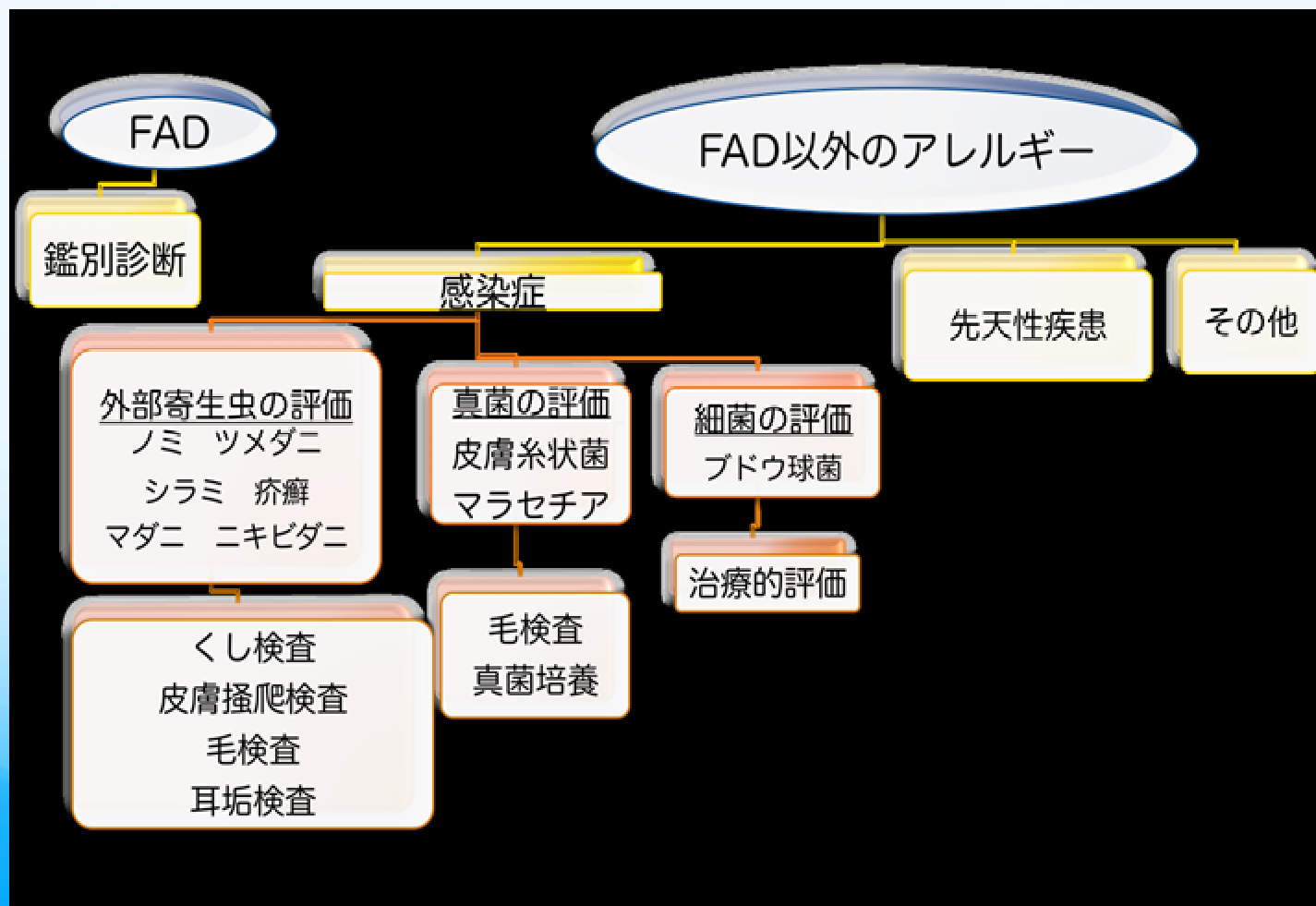
ステロイド投与量の上限として

年間投与上限量は体重1kg当り30mgという報告がある。

Dr.George H.Muller : 第25回獣医皮膚科年次セミナー、2009より

方法

- 症例 11頭の犬(柴、M.ダックス、パグ、シーズー、mixなど)
- 診断手順 **アレルギー性皮膚炎が疑わしい**



方法

感染性皮膚疾患を除外(細菌、真菌、寄生虫 等に対する臨床検査)



Spectrum Labs,Inc. のSPOT TEST

(抗原特異的IgE検査)を行う



SPOT TESTの結果に基づきアレルゲンワクチンを作製



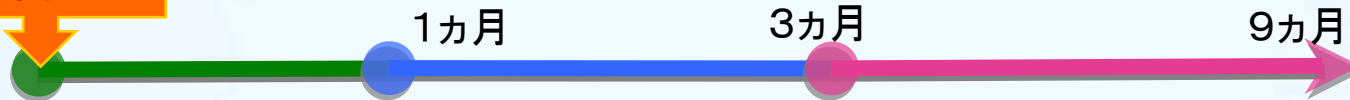
プロトコールに基づきアレルゲンの量を漸増しながら注射を行う



プロトコール終了後は維持薬にて注射を行う

アレルギーワクチン プロトコール

治療開始



バイアルA 1/720 低濃度

日	1	3	5	7	9	11	13	15	20
薬用量	0.1ml	0.2ml	0.4ml	0.6ml	0.8ml	1.0ml	1.0ml	1.0ml	1.0ml

バイアルB 1/180 中濃度

日	25	30	36	42	48	58	68	78	88
薬用量	0.1ml	0.2ml	0.4ml	0.6ml	0.8ml	1.0ml	1.0ml	1.0ml	1.0ml

バイアルC 1/60 高濃度

日	98	112	133	163	193	223	253	283
薬用量	0.1ml	0.2ml	0.4ml	0.6ml	0.8ml	1.0ml	1.0ml	1.0ml



臨床症状 評価法

犬アレルギー性皮膚炎の減感作療法に対する臨床症状変化のスコア化

薬物治療スコア

薬品名・治療法	スコア
抗菌剤/抗真菌剤/食事・シャンプー療法など	0
抗ヒスタミン剤/必須脂肪酸/局所療法	2
局所コルチコステロイド	4
コルチコステロイドの全身投与	8

評価期間



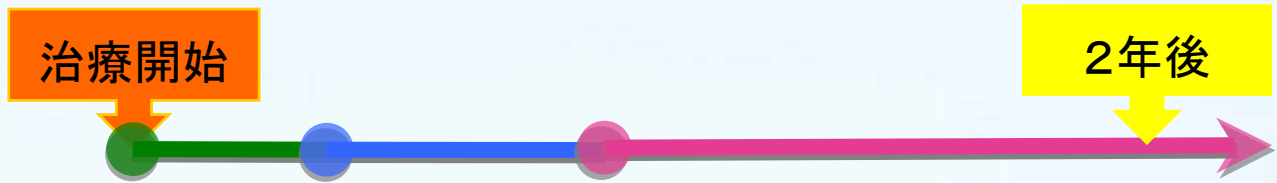
症状スコア

臨床症状	スコア
無症状/正常	0
軽度	1
中等度	2
重症/悪化	3

治療 評価法

スコア	評価	状態
A	著効	治療開始前の臨床症状は完全に消失した
B	有効	治療開始前と比較して、臨床症状は明らかに改善した
C	やや有効	治療開始前と比較して、臨床症状は改善したが、治療に対する反応は少ない
D	変化なし	治療開始前と比較して、臨床症状に変化はない
E	悪化	治療開始前と比較して、臨床症状は悪化した

症例



減感作導入前



減感作治療 2年後



症例

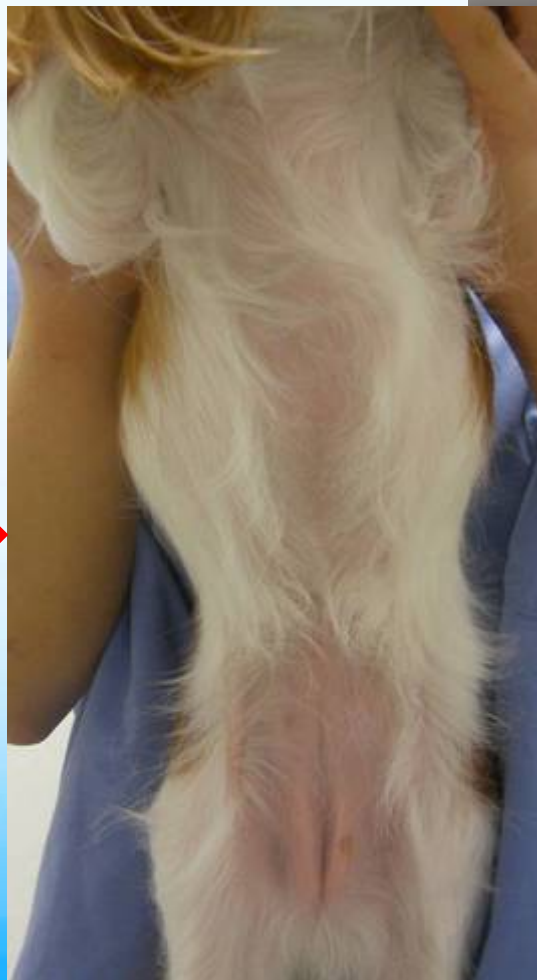
減感作導入前



治療スコア B

治療開始

1年後



減感作治療 1年後

症例

減感作導入前



治療スコア C

治療開始

1年後



減感作治療 1年後

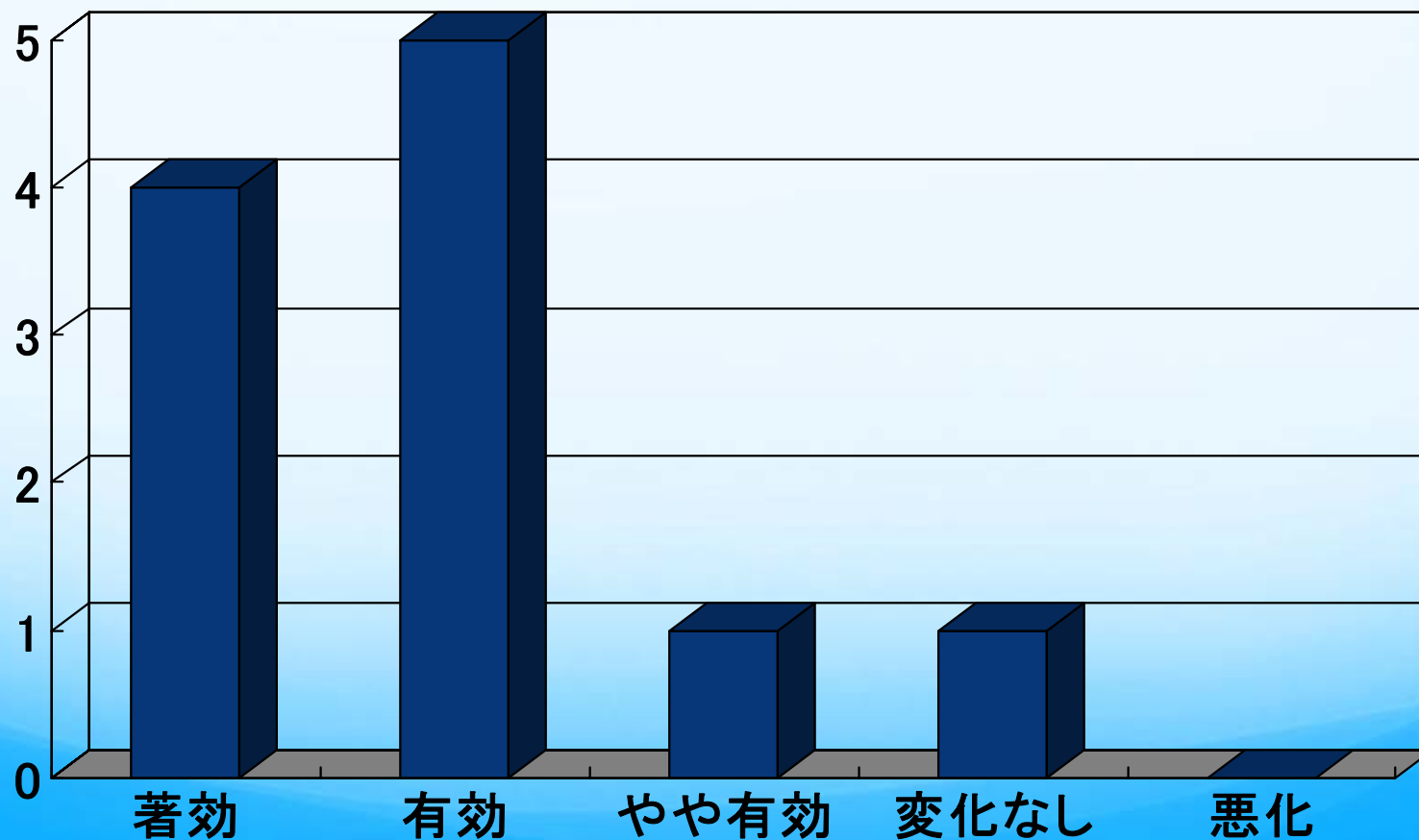


結果

治療評価

スコア	評価	状態
A	著効	治療開始前の臨床症状は完全に消失した
B	有効	治療開始前と比較して、臨床症状は明らかに改善した
C	やや有効	治療開始前と比較して、臨床症状は改善したが、治療に対する反応は少ない
D	変化なし	治療開始前と比較して、臨床症状に変化はない
E	悪化	治療開始前と比較して、臨床症状は悪化した

頭数



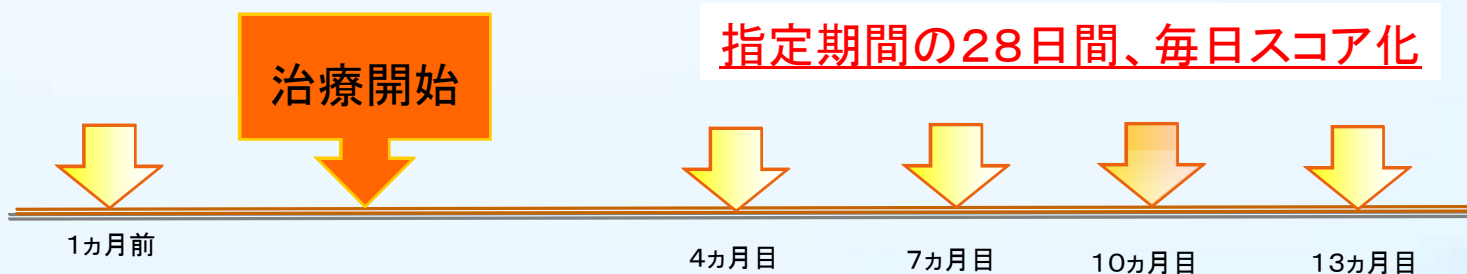
臨床症状 評価法

犬アトピー性皮膚炎の減感作療法に対する臨床症状変化のスコア化

薬物治療スコア

薬品名・治療法	スコア
抗菌剤/抗真菌剤/食事・シャンプー療法など	0
抗ヒスタミン剤/必須脂肪酸/局所療法	2
局所コルチコステロイド	4
コルチコステロイドの全身投与	8

評価期間



症状スコア

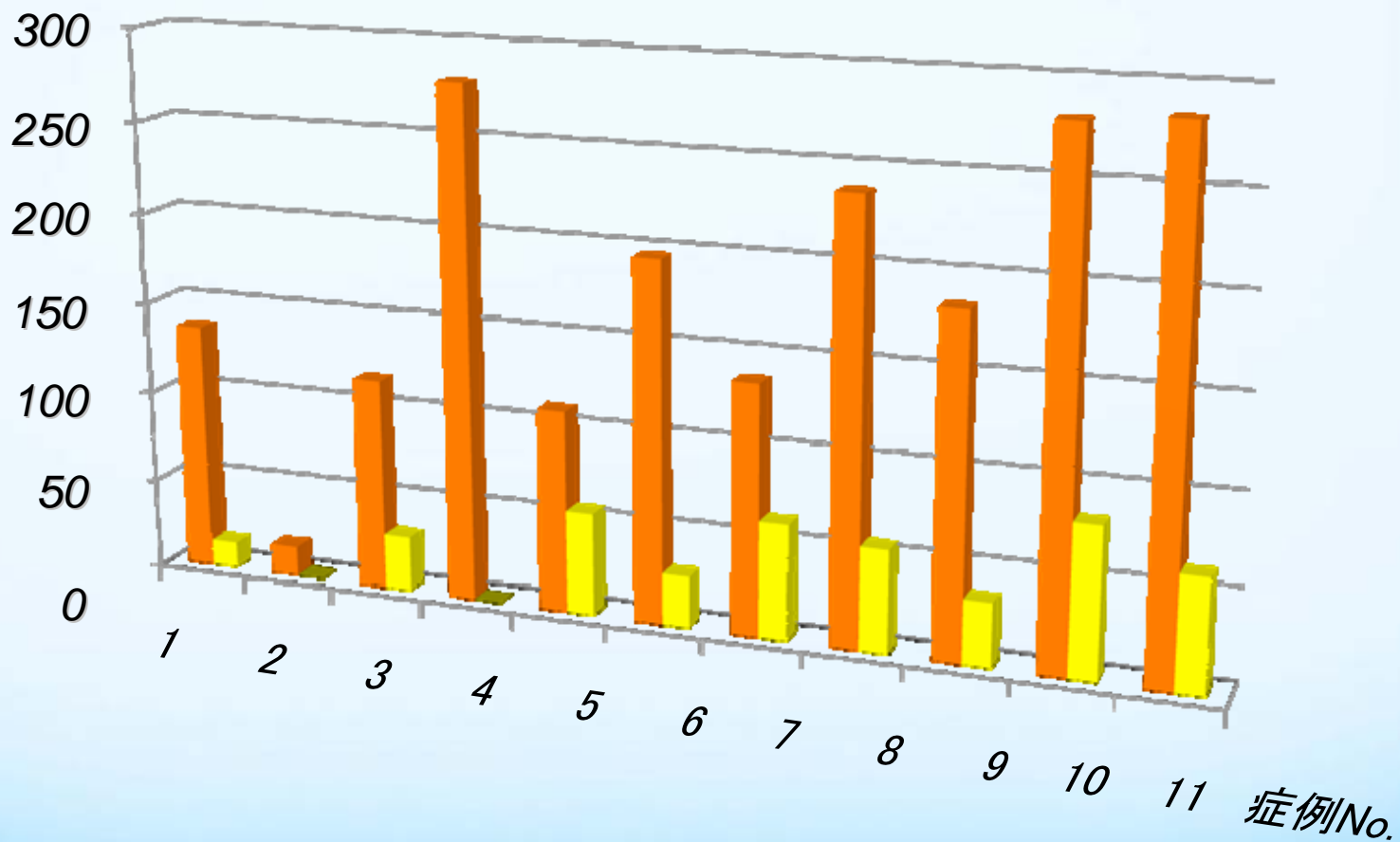
臨床症状	スコア
無症状/正常	0
軽度	1
中等度	2
重症/悪化	3

結果 薬物治療スコア

症例No.	犬種	治療前1ヵ月	治療後4ヵ月	治療後7ヵ月	治療後 10ヵ月	治療後13ヵ月
1	mix	136	0	56	0	0
2	パグ	16	0	0	0	0
3	mix	116	60	60	0	0
4	柴	280	0	0	0	0
5	キャバリア	110	56	56	56	56
6	シーズー	196	56	56	0	0
7	ダックス	136	56	60	80	56
8	シーズー	238	56	56	56	56
9	ダックス	184	56	56	28	0
10	柴	280	104	96	80	48
11	ジャックラッセル	284	56	112	56	24

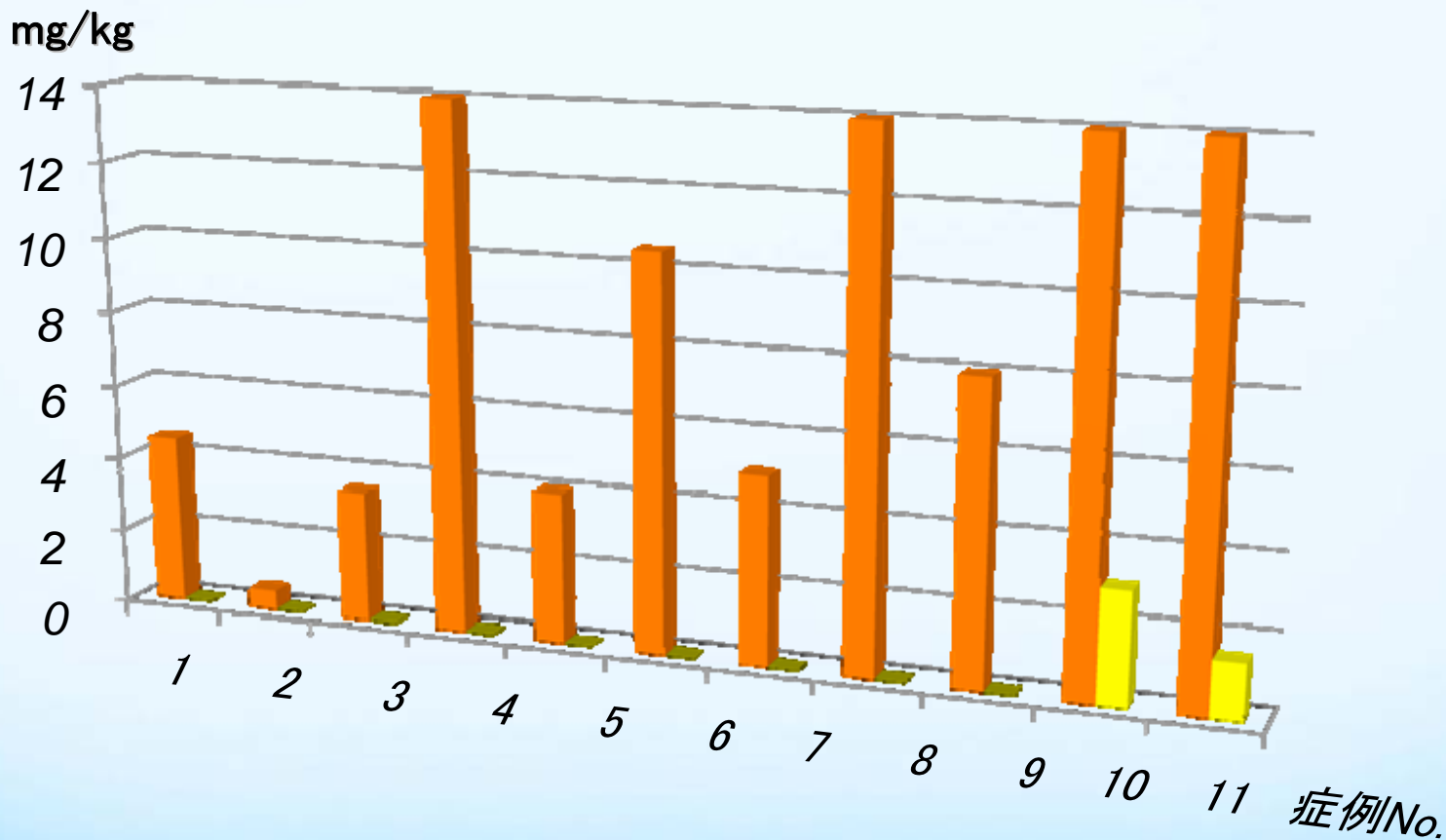
結果

薬物治療＋症状スコア



- 治療前1ヵ月
- 治療後13ヵ月目

結果 1ヶ月間 ステロイド量



- 治療前1ヵ月
- 治療後13ヵ月目

考察

減感作療法

デメリット

- 治療データが不十分
- 免疫学的メカニズムが完全に解明されていない
- 治療に費用、長期間かかる

メリット

- ステロイド量の減量
- 臨床症状の軽減
- 大きな副作用がない
- 大型犬でもコストは変わらない

まとめ

- 当院における減感作療法では、大きな副作用なしに、臨床症状を改善し、ステロイド量を軽減できる可能性が示唆された。
- 良好な結果の症例報告が増えていけば、アトピー性皮膚炎に対する治療法の一つとして、減感作療法の需要も高まるかもしれない。
- 通院負担やコスト面も課題となっているが、現在では、オーナーの負担を軽減できる急速減感作療法なども良好な結果として報告されている。今後、検討していきたい。